

出会いと発見の場

入学前レポート「私にとって日本語教育とは何か」から

山本玲

1. 動機

大学一年次に初めての海外を体験し、日本を含めた世界中からやってきたいろいろな人たちと交流するなかで、私は生まれてはじめて、「わたし」という人間が持っている固有の文化に対して敏感になった。

この体験をきっかけに、数ある自らのルーツのなかの一つである日本、日本語について学ぶことを決めた。大学での専攻を日本研究にし、日本近現代史を学ぶ研究室を選択した。そして副専攻として、日本語教員養成課程を履修することにした。

これが、私の日本語教育との最初の出会であった。このとき、私にとって日本語教育は、自分の母語である日本語を見直すための一つの手段でしかなく、「教育」という意識はまだなかった。

しかし、大学三年次に遊び行った日本語学校での一人の学習者との出会いが、私の心に大きな変化をもたらした。彼女は、初めて出会った私に、自分の伝えたいことを何とかして伝えようと、一生懸命にことばを繋ぎながら話してくれた。そんな彼女のことばに対して、私は自分の思いを伝えようと、真剣に、一生懸命になっている自分がいることに気づいた。

そして授業後、先輩に言われた一言。「〇〇さん、いつもは控えめであまり話さないんだけど、今日はあなたと話してすごく楽しかったって言ってたわよ。ありがとう。」この言葉を聞いて、彼女の必死に日本語を話すひたむきな姿を思い出した。そして、言いたいことが伝わったときに見せてくれた、嬉しさと達成感に満ち満ちたあの笑顔。このとき、私は心から彼女の力になりたいと思った。彼女のように、日本語を学ぶ人たちのために自分が何かできないだろうかとか真剣に考えた。誰かのために助けになりたい。そう思ったのは初めてだった。

彼女との出会いをきっかけに、私は日本語「教育」を本気で目指そうと思うようになった。はじめは、自分のルーツを見直すためのひとつの手段でしかなかったが、日本語教育は私の夢になった。

日本語教育を、広く外国語教育として捉えると、今まで関わってきた外国語教育のなかで、私はたくさんの「出会いと発見」を経験してきた。学習者として訪れた海外で、たくさんの異文化—そこで出会ったすべての人が持つ、一人一人に固有な文化—に遭遇することで、自文化を、つまり自分自身を客観的に見つめ直すことができた。そして、自己の見つめ直しがきっかけとなって、日本語を学ぶ人たちの支えになりたいと、本気で考える自分を新たに発見した。

教育とは、「教える側」が「教えられる側」に何かを与えるという、一方向的で固定的なものではない。学びの現場において、そこに関わるすべての人びと—それは教師でもあり、学習者でもあり、両者が関わるすべての人びともある—が出会うことで、互いに自分自身を見つめ直し、それぞれが新たな自分を発見し、成長・変化していく自分を感じることで、相互的で変容的なものであると考える。共に学び合い、一人一人が新たな自分を育てていくという意味で「共育」なのである。

このように、私にとって日本語教育とは、それに関わるすべての人びとが、その出会いを通して、新しい自分を発見することのできる「出会いと発見の場」である。

2. 対話

私は、自分の通う大学の先生（以下、M先生）と動機文をめぐって対話をした。M先生はオーストラリア生まれで、高校終了後の交換留学体験をきっかけに日本語での生活が始まったという。言語・社会・文化の関わりや、ことばとジェンダー、ジェンダー言説について研究をしている。

M先生の授業では、「当たり前のことを問い直す」ということを徹底的に行い、本当にたくさんのことを学び、発見することができた。そのため、私にとって「出会いと発見の場」である日本語教育について、M先生となら興味深い対話ができるのではないだろうかと考え、対話のお願いを申し出た。

まず最初に、私が動機文に書いてあることを補足しながら読みあげ、続いてM先生に疑問に思ったところや感じたことを言ってもらい、それに対して私が応答するという形で対話は進んでいった。以下に対話の内容をまとめた。なお、Yは筆者を表す。

2.1. 他者とのインターアクションと自分とのインターアクション

Y：大学1年のときに語学研修でニュージーランドに行ったんですけど、その語学学校でディスカッションの授業があったんです。そしたら、その

クラスにいた他の学生たちが、みんな自分の出身の国のことについて自分の意見を堂々と述べているんです。それで、じゃあ自分はどうかっていったら、日本のことについて何も知らない自分がいて、何も言えなかったんです。それで、そのときすごく恥ずかしいって思って、日本のことをもっと勉強しなくちゃいけないって思って、それで日本に帰ってから日本研究の授業をたくさんとったりしたんです。

M: 今、恥ずかしいって言ったけど、「恥ずかしい」じゃなくて本当は「悔しい」じゃない？

Y: そうですね。「悔しい」に近い感じです。

M: それで、この「悔しい」って感じたときに、どこかで日本の教育というものを意識したんじゃないのかな？他の国からきた学生が、自分の国のことについて堂々と意見を言っている。その意見は、今考えてみればそんなに大したこと言ってるわけじゃないんだけど、でもそのときはそれをすごい！と感じた。じゃあ、どうして自分はできないのか。それは日本の教育にどこか問題があるんじゃないか、どこかでそう思ったからこそ、「自分でやらなきゃ！」って思って、それで日本や日本語について学ぼうと思ったんじゃない？あと、この「数ある自らのルーツ」っていうのが気になったんだけど、これはどういうこと？

Y: これは、私という人間を形づくっているすべての要素のことで、ここの『わたし』という人間が持っている固有の文化」のことで、つまり私自身のアイデンティティのことです。日本で生まれた私であり、日本語を話す私であり、大学生の私であり、娘でありという。

M: なるほどね。この「日本、日本語」ってセットになってるのもなんか気になるけど、日本人ってなってるからよかった。それで、アイデンティティっていうのは、それだけであるものじゃなくて、相手とのやり取りの中から確立されていくものだよな。

自分と同じぐらいの年の学生が、堂々と自分の意見を述べている。それも彼らの母語ではない言語で。目の前の光景に、私は大きな衝撃を受け、そんな彼らに対して尊敬の念を抱いた。そしてそれと同時に、同じことができない自分がいることに気づき、情けない気持ちや悔しい気持ち、そして焦る気持ちでいっぱいになった。なぜ自分は堂々と自分の意見を言うことができないのか。それは母語である日本語ではなく、英語で言わなければならないからなのか。いや、そうではない。自分に

言いたいことがなかったからだ。お互いの主張を包み隠さずぶつけ合う彼らに対して、自分には彼らにぶつけるものがなかった。何が言いたいのか、何を言えばいいのかわからなかった。

ここでは、アイデンティティは相手とのやり取りの中から確立されるという話が出た。アイデンティティ／identityということばは、ラテン語の *identitas* を語源にもち、日本語におけるその意味は「人格における存在証明または同一性。ある人の一貫性が時間的・空間的に成り立ち、それが他者や共同体からも認められていること。自己の存在証明。自己同一性。同一性。」(『広辞苑(第5版)』岩波書店)とされている。

しかし、ここで注意しなければならないのは、「時間的・空間的に」存在し、「他者や共同体からも認められている」という「ある人の一貫性」は、唯一無二のものではないということである。人間は、あらゆる時空間において、自分以外の誰からも認められている一つの「一貫性」によってしか自己の存在証明をすることができないのだろうか。

そうではない。人間は、そのとき自身が存在するその場において、その場を共有する他者との関わりあいのなかで、自己の在り方を自覚し、それを実践するのである。よって、ある特定の時空間において、特定の人間関係のもとで自覚される、特定の自己なのであり、存在する時空間が変われば、そこでの人間関係も変わり、自覚される自己も当然変わってくる。たとえば、家にいるときは「娘としての自分」であり、学校にいるときは「学生としての自分」を、意識的であるにせよ無意識的であるにせよ、自覚し、実践しているのである。あるいは、同じ学校という時空間においても、クラスの友達といるときの「自分」、部活の友達といるときの「自分」、先生の前にいるときの「自分」とでは、それぞれの場において証明される自己のあり方は、同一のものではありえない。

また、アイデンティティとは、ある時空間において「成り立つ」という受動的なものではない。その人自身が、複数のアイデンティティのなかから、そのとき存在する時空間においてその場の構成員との関係から、自分がふさわしいと考えるアイデンティティを「選択」し、「表出・遂行」する、という能動的で積極的な営みであると私は考える。

このように考えると、私が語学学校のディスカッションの場に身を置いていたときに、何を言えばいいのかわからなかったと感じたのは、そこでどんな自分を打ち出していけばいいのかわからなかったということではないだろうか。つまり、複数ある自分のアイデンティティの中から、どのアイデンティティを選択し、表出・遂

行すればいいのかわからなかったということである。なぜわからなかったのか、それは、そこで自分が自信を持って打ち出すことのできるアイデンティティを、その時点で確立しきれていなかったからである。だからこそ、何を言いたいのか、何を言えればいいのかわからなかった自分に対する焦りや情けなさ、そして不安な気持ちが募り、「自分でやらなきゃ！」と目覚めたのである。

私はこのとき感じた気持ちを今でも鮮明に覚えている。そして、これらすべての感情が複雑に絡み合い、それが原動力となって「自分でやらなきゃ！」と自己を奮い立たせたのだ。誰かに教えられたからとか、誰かにやれと言われたからではない。他者との関係の中に身を置き、人と人とのぶつかり合いの中から気づき、自問自答の中らつかみ取った、私だけの学びである。つまり、他者とのインターアクションと自分とのインターアクションの両方の作業をすることによって、「自分でやらなきゃ！」と自分で感じ取ったのである。

2.2. 人間関係を楽しむ

M: 人と話していて楽しいときって、2つ理由があると思うんだけど、1つは、人間関係を楽しんでいるとき。すごい仲のいい友達となら、どんなにくだらない話でも何時間でもできちゃう。これって相手との人間関係を楽しんでいるってことだと思うのね。2つ目は、テーマを共有しているとき。例えば、学問の話とかすごいマニアックな話なんだけど、この人となら何時間でも話せるし飽きないし、楽しい。こういうときって、相手と話の内容を共有しているから楽しいって感じるんだよね。それで、この日本語学校で彼女と話したとき、あなたはどうかだった？

Y: 彼女とはもちろん初対面だったんですけど、彼女が韓国の大学で日本文学を専攻していて、私も読書が趣味なので、夏目漱石とか読むの？なんて好きな作家の話とか、読んだことのある本の話なんかでかなり盛り上がったんですよ。

M: そのとき、彼女に「日本語を教える」って意識あった？

Y: いや、全くないです。ただ会話を楽しむって感じで。

M: その彼女と話したときの達成感とかよろこび、楽しさは、さっき言った2つがあったからなんじゃないかな。つまり、彼女とは1対1でヒト対ヒトの付き合いをした。だからこそ、彼女もあなたも楽しかったし、達成感を得られたんじゃない？

Y: 確かにそうかもしれません。だからこの「一人の学習者」っていうのもお

かしいですね。さっき自分で読みながら、なんか違うよなあって思ってたんです。

M: うん、おかしいよね。だって「学習者」じゃないよね。

Y: はい。「一人の人間」として私は彼女と接していました。

M: この「彼女の力になりたい」とか「日本語を学ぶ人たちのために何かできないだろうか」とか「誰かのために助けになりたい」というのもおかしくない？「～してあげる」、「助けになる」というのは、後半の「共育」と矛盾しているよね。

Y: はい、おかしいです。「～してあげる」とか「～してもらう」という関係じゃないです。

日本語学校で出会った彼女に対して一生懸命になったのは、彼女の声によって語られる彼女の思いを共に分かち合いたかったからである。他の誰でもない彼女の声、それは教室や教科書から解放された自由な空間で発せられる、ありのままの彼女自身の声である。そしてその声によって語られる彼女の思い、それは、他の何からも縛られることなく自由に語ることのできる、本当の自分の思いである。

このとき私の目の前にいたのは「学習者」としての彼女ではなく、一人の人としての彼女自身だったのである。だから、私も他の誰でもない私の声で私の思いを語った。相手が日本語を勉強しているからとか、日本語を教えてあげたいからとかではない。ありのままの自分をぶつけてくる彼女に対して、私もありのままの自分をぶつけたかったからである。

こうしてお互いの思いをぶつけ合うことで、二人の間に人と人との関係性を築くことができた。このとき彼女が見せた嬉しさと達成感に溢れたあの笑顔は、自分の言いたいことが相手に伝わったからでもあり、一方で、自分の思いを相手と共有し、共感できたからでもあるのではないだろうか。私を感じた「楽しい」という感情も、一人の人として彼女と話題を共有し、それぞれの思いを語り合い、ともに共感することができたからこそ感じえたものなのであり、このような関係性の中でしか得ることのできないものなのである。

もしこのとき、目の前にいた彼女に「学習者」として接していたらどうなっていただろうか。相手に「学習者」という一つの役割を与えることによって、相手と自分との関係が「教えられる者」—「教える者」と固定化されてしまう。そして、「学習者」ということばによって、その場にいる人と人との関係性が序列化され、生身の人と人との関わり合いができなくなってしまうのである。

一度、関係性が固定化されると「教えられる者」である「学習者」は、「教える者」によって「日本語を学習すること」が至上とされる。そうすることで「教える者」は、知らず知らずのうちに「学習者」たちを「できる学習者」と「できない学習者」とに分類し、「できない学習者」を疎外するという構造が生み出されてしまうのではないだろうか。彼／彼女らは「学習者」である前に、一人の人間であるのにもかかわらず。そうなってしまうと、もはや人間関係を楽しむということではできなくなってしまうだろう。「学習者」としてのラベルを貼られた彼／彼女らは、意識的であるにせよ無意識的であるにせよ「学習者」として、つまり、日本語を「教えてもらう者」として振る舞うことを余儀なくされる。一方で、もし私が日本語を「教える者」としての役割を背負ったとしたら、相手を「学習者」としてしか見られなくなるだろう。そうすると、その人がもっている、その人だけの面白さや可能性を見落として、「日本語」の能力だけで相手を見るという危険性を孕むことになりかねない。「日本語」というのは、彼／彼女らを形作る要素のほんの一部でしかないのにもかかわらず。そして、その場を共有する人間にとって「日本語を教えること」、「日本語を学ぶこと」がすべてになり、そこでは、その場に存在するすべての個々人が持つ自発性や創造性、可能性が「教える」－「教えられる」という関係性によって埋もれてしまうのである。

では、人間関係を楽しむとはどういうことか。それは、ある一つの場を共有しているすべての人が、誰かによって序列化されることなく、自分らしくいることができ、ほっとするような安心感を得ることができるということではないだろうか。それは、誰かによってラベルを貼られることなく、「自分」という一人の人間を打ち出していくことができるということであり、そこでは、多様な背景を持った人たちの十人十色の「自分」が互いに交錯し、絡み合うことによって、生身の人と人との重層的な関係性が作りあげられていくだろう。

自分とその場を共有している他者との関わりの中で、自由に「自分」を語ることができ、一方で他者が語る「自分」にも耳を傾け、そこからまた新たな「自分」を再発見することができるような、そんな人間関係を築くことからことばの学びの場というのは始まるのではないだろうか。それは、「ことばを学ぶ／教える」ということがまず先にあるものではない。ことばとは、他者とのやり取り、そしてそれに基づく自分とのやり取りを重ねながら、絶えず更新し続けていく「自分」を感じるなかで、獲得されていくものではないだろうか。そして、このようにして獲得されたことばこそが、他の誰でもない自分だけのことばであり、「自分」を語ることのできることばなのである。

2.3. 「共育」— 自分世界の構築

Y: 私が今まで経験してきた外国語教育って、学習する側の人間として、というのが主だったんですけど、最初に言った、海外での体験で、自分自身を客観的に見つめ直すっていうか、この客観的におかしいって今自分で思ったんですけど、つまり、内なる自分を見るっていうか、自分を外から見るとか、とにかく「自分」というものの存在に対してすごく意識的になったんです。それから、日本語学校の彼女だけじゃなくて、大学で履修している日本語教員養成課程の授業で、学内の留学生たちと触れ合う機会をたくさん持つようになって、この人たちの助けになりたいっていうか、この助けになりたいっていうのもなんかおかしいんですけど…。私、前期にモーニングクラス¹⁾をやっていたんですけど、それがすごく楽しかったんですよ。

M: モーニングクラスって、内容はどんなことやるの？

Y: モーニングクラスは留学生の日本語学習支援なんですけど、基本的に留学生のやりたいことをやるっていうことになっているんです。だから、授業の宿題を一緒にやるところもあれば、一緒に日本語の映画を見るところもあるし、おしゃべりをするっていうところもあって、留学生一人一人で内容は全部違うんです。それで私の担当した留学生は、授業で出た宿題を見てほしいっていうことだったので、彼女が持ってきた宿題を、同じ担当の学生たちと彼女とみんなで、ああでもないこうでもないって考えたりして。

M: そのとき、留学生に「日本語を教える」という意識あった？

Y: う～ん、ないですね。教えてるっていう感じじゃないんですよ。

M: つまりここでも、一人の人間として相手と向き合っていたっていうことなんじゃないかな？留学生が何か質問をしてくれば、ただそれに答える。それだけ。

Y: そう、そうなんです。別に教えてるっていうわけじゃないんです。

M: あなたが今まで経験してきた、海外、日本語学校、モーニングクラスでの経験って全部、教室以外の場なんだよね。海外でも、ディスカッションをしているとき、そこに「先生」はいなかったでしょ？つまりそこで、ヒトとヒトとがぶつかり合う、共同作業をすることを体験してきた。その場にいたと

1) 学内の留学生に対する学習支援のこと。日本語教員養成課程の授業である日本語教授法演習クラスの中から担当希望者を募り、2～3人の学生が各留学生一人を担当する。

きに自分に「教える」とか「教えてもらう」という意識がなかった。だからこそ、お互いに達成感とか得るものがあったんじゃないかな。

何か新しいことを学ぶ、始めるということは、それまでは未知の世界であったところに足を一步踏み入れるということであり、それは新たな発見の連続に伴う自身の世界観や価値観の拡張、変容をもたらす。これは、ことばを学ぶことに限らず、あらゆる対象について、学ぶという行為をする限り普遍的なものである。

たとえば、私は大学に入ってからフィールドホッケーというスポーツを始めた。それまでは、名前も聞いたこともなければ見たこともない、文字通りまったく無縁で未知のスポーツであった。しかし、ホッケーを始めてから、今までは見えなかったものが見えるようになったのである。それは、サッカーである。ホッケーというスポーツは、ボール運びの流れがサッカーのそれと似ている。そのため、サッカーの試合を見ていると、こういう流れでボールが運べたらいいなあ、とか、今ボールがつかったのはここでこの人が走りこんでいたからだな、などとよく思ったりする。ホッケーを始める前までは、サッカーのルールはおろか、日本代表のテレビ中継でさえ目もくれなかった私であった。それが、ホッケーを始めてからサッカーに興味を持つようになり、ボールの運び方やボールを持っていない選手の動きにまで注目できるようになったのである。大げさな言い方かもしれないが、ホッケーを始めたことによってサッカーが見えるようになったのであり、私の世界観は変容し、拡張したのである。

これはきわめて卑近な例であるが、何かを学ぶ、始めるということは、このように今まで意識することのなかったものを意識するようになり、見えなかったものが見えるようになるということである。

では、ことばを学ぶことで改めて見えてくるものは何だろうか。それは「自分」というものの存在であると私は考える。なぜなら、ことばというのは自己表現の手段の一つであるからである。

ことばによって自己を表現するということは、「自分」というものの存在に対して意識的になるということである。自分は何を伝えようとしているのか、何を伝えたいのか、そして「自分」とは一体どういう人間なのか。「自分」を意識するということは、このような問いを自らに突きつけることを余儀なくされるということである。

では、なぜ人はこのように「自分」というものの存在に対して意識的になるのであろうか。それは、その人の周りに「自分」をアピールすることができる他者の存

在が常にあるからである。人間、そしてその一人一人が持つ「自分」というものは、ただそれだけで存在するというものではなく、他者との関係性において存在するものである。学校や会社、そして家族、友人など、人間は何らかの集団に属しており、常に他者との関わりをもっているのであるが、いつでもどこでも全て同じ「自分」であり続けるというものではない。そのとき、その場において、そこにいる他者との関わり合いの中で、自分が一番自分らしいと思える「自分」を選択し、打ち出していくのである。そのような意味で、個々人が持つ「自分」というものは、自分以外の他者と対峙することで初めて意識され、そのときそのときで目まぐるしく変化し、その変化を重ねて成長していくのである。

ことばを学ぶ場合にしても同様である。学びの場における他者との関係の中で、自分が相手に投げかけた「自分」に対して、相手は何かを返してくる。そして自分に返ってきたものを内省し、吟味して再び自分のことばで相手に投げかける。このような他者とのやりとり、そして自分自身とのやりとりを繰り返していく中で、自分が本当に伝えたいことは何なのか、自分が考えていることは何なのか、そして自分が一番自分らしいと思える「自分」とは何なのかということを自分の頭で徹底的に考え抜く。そうすることで、今まで見えなかった「自分」が見えるようになるのである。そして絶えず変化・成長し続ける「自分」を感じ、新たな「自分」を発見・再認識し、それを再び他者に向けて自分のことばで語る。

このように、ことばを学ぶということは、ただ独りで成し得るものではない。学びの過程の中で、たくさんの他者と関わり、それぞれが「自分」を語ることばを交わす中で学び、自分のものにしていくものである。そして、その他者との関わりを通すことで、「自分」というものの存在を強く意識するようになり、今まで見えなかった「自分」のある部分が改めて見えるようになるのである。それがまさに、「自分」を見る自分の世界観・価値観の変容と拡張である。それは誰かに教えてもらうものでもなければ、教えてあげるものでもない。そのような序列化された人間関係においてではなく、生身の人と人とのぶつかり合いの中で、本当の「自分」を語り合うという共同作業を通して、広がる世界観を、そして変わる価値観を自分で感じ取っていくものである。それは、一人一人がそれぞれに固有の自分世界を構築するという営為なのである。そして、自分世界を構築することを通して、誰かに教えてもらったものではない、自分で学び取った、自分だけのことばを獲得することができるのではないだろうか。本当の「自分」を語ることのできる、他の誰のものでもない自分だけのことばを。

他者との対話、そして自分との対話を重ねることで、絶えず変化・成長し続ける「自分」を語ることでできる、自分だけのことばを獲得すること。そして一人一人が、互いに影響を与え、作用し合うことでそれぞれの「自分」を育み、それぞれに固有な自分世界を構築すること。それこそが「共育」なのである。

3. 結論

3.1. ありのままの「自分」をぶつけるということ

ことばを学ぶことで、自分以外のたくさんの他者と出会うことができる。そして、共に会うことでお互いに影響を与え合い、変化・成長することができる。このような意味で、ことばを学ぶということは、双方向的かつ相互的であり変容的なのである。そして、学びの場に関わるすべての人—教師も学習者も含めて—が変容し、成長することができるという意味で「共育」なのである。

これは先述した動機文の段階での「共育」に対する私の考えを要約したものである。動機文を書き終えた時点では、ニュージーランドでの経験や日本語学校での出会いから、教師が学習者に何かを教えるだけが教育なのではなく、教師もまた学習者と共に成長することができるのだ、とただ漠然と考えていた。

だが、ここには大きな視点が欠けていた。それは「なぜ変容し、成長することができるのか」という視点である。なぜ、私はニュージーランドの語学学校での経験から、「自分でやらなきゃ!」と感じ取ることができたのだろうか。なぜ、私は日本語学校で出会った彼女との会話を楽しむことができたのだろうか。それは、それぞれの場において一人一人が「教える」—「教えられる」という関係性から開放され、ありのままの「自分」をぶつけることができたからなのではないか。そこは、一対一の人間同士の場であり、「教師」と「学習者」は存在していなかった。だからこそ私は「自分でやらなきゃ!」と感じ取ることができたのであり、人間関係を楽しむことができたのである。

「共育」を達成するためには、誰かによって、あるいは何かによってラベルを貼られ、抑圧された状態の関係性ではなく、一人一人が自由に「自分」を打ち出し、抑圧されることのない、ほっと安心することができる関係性が不可欠だったのである。私が「共育」という概念を形成するのに大きな影響を与えていたのが、私自身のこれまでの経験であったにもかかわらず、その経験がどうして「共育」という概念を生み出したのか、あるいは、どのように「共育」と関わっているのか、動機文

を書いた段階ではそこまで考えを深くめぐらせることができなかった。そればかりか、学びの場にいる人を「教師」と「学習者」というように、無意識のうちにレッテルを貼ってしまっていたのだ。それはまさに「共育」と正反対の行為である。

だが、M先生と対話をしたことで、なぜ「共育」なのかということに気付くことができた。M先生のことばを受け、今までの経験をもう一度、自分の頭で徹底的に考え抜いた。そして、大切なことに気付くことができたのである。

先生と対話をしていくうちに、私はだんだん先生のことを「M先生」と呼ぶことに違和感を覚えるようになった。これは、私と先生が、「学生」と「教員」という立場を背負って対話をしていたのではなく、一人の人と一人の人として対話をしていたということの紛れも無い証拠なのではないだろうか。私の目の前にいる人は「M先生」ではなく「〇〇(先生の名前)」という一人の人なのである。だからこそ、私はどのようにして「共育」という概念を形成するに至ったのか、そして「共育」として何が一番大切なことなのか、という根本的なことに気付くことができたのである。私は、「学生」と「教員」という立場を超えて、ありのままの自分と自分とのぶつかり合いを通すことで本当に自分が言いたいことは何なのか分かる、ということを自分のからだで理解することができたのである。先生との対話を通して私が学んだことは、他の誰でもない私という人間が学んだ私だけのものであり、これから先も私の日本語教育観の根幹を成すものになるであろう。

3.2. 「共育」— 私という人間をきっかけに

M先生との対話を終え、内容を文章化しながらもう一度、「なぜ、私は日本語教師を目指そうと思ったのか」、そして「私にとって日本語教育とは」ということを自分に問うてみた。そして、自分はどのような日本語教育のあり方を目指していきたいのか、自分の考える「共育」とはどのようなものなのか、ということについて改めて考え直した。

私にとって、日本語教育とは、日本語教師とは、「教師」が「学習者」にことばを「教える」というものではない。自分がことばによって表現したいことは何なのか、自分が相手に伝えたいことは何なのかを、一人一人が自分の頭で考え、それについてその場を共有する人と話をする。そして再び自分の頭で考え直し、そこで新たな発見や気付きを得ることで、本当に自分が伝えなかったことが何だったのかがわかる、ということのおもしろさ。このおもしろさを得ることができ、それをその場にいる人と共有することができるのが、日本語教育の場なのではないだろうか。他者とのやり取りと自分とのやり取りを通してのみ得ることのできる、自分だけの

新たな発見や気づきである。それは、何かのレッテルを貼られた者同士のやり取りではなく、ありのままの自分同士のぶつかり合いの中から、それぞれが新たな発見をし、めまぐるしく変わっていく「自分」を肌で感じる場なのである。

そして、日本語教師とは、そのような場において、他の誰もが生身の「自分」をぶつけることのできる存在なのではないだろうか。つまり、「ことばを教えてもらう」という役割から開放された、ありのままの飾らない「自分」をぶつけることができる「一人の相手」として存在しているということである。「一人の相手」とは、「ことばを教える」という役割に束縛されない自由な存在である。私という人間との出会いをきっかけに、自分の頭で考え、新たな発見や気づきを得る。一方で、私自身も相手とのやり取りを通して、それまでの価値観や世界観を変えたり広げたりすることができる。

日本語教育とは、生身の人間同士のやり取りを通すことによって、互いに成長・変化することができるという意味で「共育」の場なのである。そして日本語教師とは、そのような「共育」の場において、他の誰もが飾らない「自分」をぶつけることができる一人の相手であり、そうすることでその人が成長・変化するきっかけとなる存在であり、自身もまた、他の誰かにありのままの「自分」をぶつけることのできる存在なのではないだろうか。

おわりに

今回の対話では、対話をするということの意味についての自分の考えが明確になっておらず、対話の相手に私の動機文を読んでもらったうえで、何について話をすればいいのか、今ひとつ理解していなかった。そのため、私がリードして対話を進めていくのではなく、私の言うことに対して、M先生が質問をすることで話が進んでいった。私自身の考えを相手にぶつけ、対話をするなかで自分の考えをより深めていくことができなかつたという意味では、私の対話はあまりいいものではないのかもしれない。しかし、対話をしたことで、自分の考えていたことは何なのか、自分が本当に言いたいことは何なのかがよくわかってきた。

「他者との対話が自己理解につながる」「ありのままの自分と自分のぶつかり合いによって自分に変化する」という文言は、頭では十分に理解しているつもりだった。だが、M先生との対話を通して、それを自分のからだで理解することができた。それまでは霧が覆われて漠然としか見えていなかったものが、先生と話をしたことで、霧が晴れ、輪郭が見えてきた。最初の動機文に書いたことと、本当に自分が言いた

いこと、本当に自分が考えていることとの間のずれに気付くことができ、それに基づいて内省をすることで、本当に自分が伝えたいことは何なのかということが見えてきたのである。

対話を終えた今、私は対話をする前とした後での自分の変化を楽しんでいる。対話をしたことで、私の世界観は確実に変容し、拡張している。他者と対話をしたことで、実際に変化する自分を感じることができ、そんな自分を楽しむことができたという意味では、今回の対話は、私にとって非常に大きな意義を持つものだったと考える。

一方で、対話をするものの難しさも痛感した。元来私は、他者とのやり取りよりも、自分とのやり取りを、つまり、誰かと話をするのではなく、自分独りで考え、自問自答してしまう傾向が強かった。そのため、自分の発言に対して相手が答え、それに対してまた自分が応答する、という当たり前のやり取りを瞬間的にこなさなくてはならないということが想像以上に難しかった。さらに、相手の答えを受けて、それについて自分はどう思うのか、という自分とのやり取りも同時進行で行わなくてはならないので、それは大変な作業だった。大学院では、他者とのインターアクションと、自分とのインターアクションとのバランスをうまくとることが当面の課題になりそうだ。そして、絶えず変化する自分を感じる心を持ち、同じ志を持つ仲間と切磋琢磨していきたいと、改めて決意した。

最後に、突然の申し出であったにもかかわらず、対話の相手をするのを快く引き受けてくださったM先生に、心からお礼と感謝の意を申し上げたい。今回の対話が私にとって大きな意義のあるものになったのも、M先生という相手に恵まれたからだと思っている。本当にありがとうございました。